

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

- 地球の木講座2022 1~2
- あーすフェスタかながわ2022 3
- 出前講座報告 3
- ラオス図書プログラム オンラインイベント報告 4
- ネパールプログラム オンラインイベント報告 5
- ネパール インドラサロワール農村自治体 5
- ラオスプログラム勉強会 6
- 遺贈寄付~次世代への贈り物 7
- 地球の木と私 7
- 筒井由紀子さんアークスNGO大賞に 7
- インフォメーション/活動日誌 8

地球の木講座2022(2023/1/14)

多様な背景をもつ人びと 「共に生きる」社会をつくるために

設立30周年を迎えた一昨年、地球の木はミッションステートメントを出し、国際協力と共に「多文化共生」の重要性を明記しました。これまでネパール、ラオス、カンボジアで弱い立場の人々の声を聴きながら地域づくりや教育の支援をしてきましたが、国内でも実践していきたいと考えています。

「多文化共生」という前に、日本に住む外国人の現状について知り、人権の視点から私たちにできることを考えてみよう、と地球の木講座を企画しました。講師は鈴木江理子先生。国士舘大学文学部教授で移民政策、人口政策、労働政策を研究するかわら、外国人支援の現場でも活躍されています。待たなしの「移民社会」。増え続ける「外国人」と共に生きていくすべての人に聴いてほしい講演でした。

日本に住む外国人の増加

2021年の日本は、194の国や地域にルーツを持つ276万の外国人が暮らす多文化共生社会。国籍による増減は、その時々の世界情勢や日本政府の方針によって推移するが、外国人登録者のトップ5は、中国人、ベトナム人、韓国人、フィリピン人、ブラジル人。1980年代前半までは「オールドカマー」と呼ばれる、旧植民地(主に朝鮮半島)にルーツをもつ人々が多かったが、グローバル化の中で「ニューカマー」が93%と圧倒的多数を占めるようになった。総人口に占める外国人の割合は2.2%。

多文化化する日本

本来、国家とは領土と国民から成る。その国家の構成要素に変化が起きている。国民ではない人たちが増え、また、日本

国籍を取得した元外国人、国際結婚のもとに生まれたダブル(ハーフ)の子どもなど、外国ルーツの日本人も増えている。2020年に日本で出生届けが出された子どもの24人に1人は外国ルーツの子どもである。もはや彼/彼女らはマイノリティではなく、やがてこの社会を担うようになる存在である。それを前提に



講師の鈴木江理子先生

どうやって社会を創っていくかを考えなければならない。

「共に生きる」ために必要な2つの視点

多文化共生を推し進めていくには、「ちがい」と「おなじ」の視点を持つこと、即ち、国籍、民族の異なる人々が多様性を認め合い(⇒「ちがい」、対等な関係を築き(⇒「おなじ」、社会を創っていくことが大事である。

ところが、その「おなじ」を実現するためには、越えるべき壁が3つある。

- 母語ではない公用語(日本語)の「言葉の壁」
 - 参政権なし、義務教育からの排除、生活保護の適用制限などの「制度の壁」
 - 住居・就職・雇用差別、差別的な言説、いじめなどの「心の壁」
- この3つの壁が、社会経済的不平等(格差)を生み出している。これらを労働、教育の面から考察する。

労働面における差別

外国人労働者は都合のよい調整弁?

外国人労働者は、制度的には平等が保障されているが、実態としてはさまざまな不平等に直面している。公務員の外国人採用にも制限が課せられている。外国人であるという理由で昇進できなったり、不当な賃金で働かされたりしている。また、景気の良し悪しにより、外国人労働者は、都合のよい調整弁として利用されやすい。派遣など間接雇用的人が多く、雇用が不安定で、何かあると真っ先に解雇される。リーマンショックで多くの外国人が解雇されたが、再びコロナ禍で同じような事が繰り返されている。

技能実習生で労働力不足解消

技能等の移転という国際貢献を目的とした制度のもと受け入れられている技能実習生が、実態としては、安価な労働力として「活用」されている。学ぶことを目的とする留学生の7割がアルバイトをしており、貴重な「労働力」として日本社会を支えている。

教育面における差別

母語教育の貧困

外国人は義務教育の対象ではないというのが政府見解である。その結果、不就学の子どもが生ま出されている。教育は親にとっては義務であるが、子どもにとって権利である。希望すれば、一条校に入学できるが、そこでの教育は、日本人を前提とした日本語によるものである。母語や母文化に配慮した外国人学校に通うこともできるが、日本政府からの財政的支援はない。そのため、親の経済状況次第で子どもは学びの場を逸する。リーマンショックの後、生徒が減ったブラジル人学校が、閉校に追い込まれた例もある。

ボランティア頼みの日本語サポート

一条校に通う外国籍の子どもの4割以上が、学年相当の日本語能力が欠如しているという問題をかかえながら在籍している。日本語がわからないまま、ずっと教室に座ってわからない授業を受ける子どもや、ついていけないために不登校になる子どももいる。

日本語に困難を抱える子どもに対する日本語指導は、制度的に確立されておらず、自治体による格差も大きい。高校進学についても、日本人の生徒の9割は高校に進学するが、外国ルーツの子どもたちは十分に進学できていない。

義務教育は国民だけのもの?

ニューカマーの子どもが増加した90年代、不就学の問題が顕在化したにもかかわらず、長く国は対応をしなかった。2019年、ようやく国は就学実態の全国調査に乗り出した。22年調査によると、およそ1万人が不就学の可能性がある。国籍にかかわらず学ぶ権利を保障するためにも、前述の政府見解を見直す必要があるだろう。



質問に答える鈴木先生(左)

共に生きるには…

そもそも社会というものはマジョリティにとって都合よくできている。共に生きるには、マジョリティである私たちが変わっていかなければならない。その一つに多文化共生教育がある。幼少期から多様なものに触れると自然に「ちがい」に対する寛容性を身につけることができる。「外国人」ではなく、「〇〇さんを知る」「〇〇さんと友達になる」など、一人ひとりを知り、共に生きるという姿勢が大切である。

講演の後、地球の木・多文化共生チーム長の山田さんから3年間にわたる多文化共生の活動報告があり、鈴木先生への質疑応答へと続きました。鈴木先生の最後のコメントが印象的でしたのでご紹介します。

「私は外国人を“支援する”というよりも、私の人生を豊かにしてもらっています。彼/彼女らに出会って人生などの同じことを語り合えば、同じ人間です。違いよりも同じことが見つかり、一緒に喜んだり、悲しんだり、怒ったりし、その積み重ねの中で『この人たちここで不便しているね』ということに気づき、問題解決のために行動することができたら、社会は絶対によくなくなっていきます」

多文化共生に実際に関わっている人、関心の高い参加者から多くのご質問やご感想をいただき、学びの多い地球の木講座となりました。

(地球の木講座2022実行委員長 乳井 京子)

多文化? 共生? 地域づくり? あなたと私にできること

会場は象の鼻パークと神奈川県庁本庁舎大会議場。屋外に設けられたステージでは各国の踊りや歌など、テントでは楽器のワークショップや民族衣装の試着、写真の展示など、多彩なイベントが繰り広げられました。

あーすフェスタは「みんなで育てる多文化共生」をテーマに、外国籍県民、民族団体、NPO・NGO、市民が共に創るおまつりで、2001年から行われています。地球の木は第1回から実行委員として関わっています。今回私が参加したフォーラム部会には、大学生が6人も参加していました。約半年間かけて、まるでフォーラムの予行演習のようなミーティングが何度も行われました。

さて、大会議場で開かれたフォーラムの第1部は、宇都宮大学名誉教授の田巻松雄先生の基調講演「多文化共生の現状と課題」でした。特に印象に残ったことは、2020年総務省が出した『地域における多文化共生推進プラン』の改訂版には、多様性・包摂を謳い、誰もが活躍できる社会、誰ひとり取り残さないことが強調されています。しかし、「本当に誰もが学べる社会になっているのか?」という問いかけです。国公立大学で初めての「外国人生徒入試」を導入し、自主夜間中学を始めたという田巻先生の行動力に強く心を打たれました。「できることから始め、退かない」「3人いればできる」「知ることが原点、これは1人でもできる」と元気づけられる言葉で締め括られました。

第2部では5人のパネリストがそれぞれ語ってくれまし



第2部のパネルディスカッション

た。ベトナム出身の大学院生コアさんは、ベトナム人の親子に情報を伝える役割を担いたいと話しました。カナダ国籍のノーマンさんは、在留資格を課題にあげました。中国の趙さんは、日本社会とのより深い関わりを持ちたいと企画員になりました。韓国籍の裴さんは、園児が約10カ国のルーツから来ている川崎の保育園に勤めていて、「違いは豊かさ」であり「一人ひとりを大切に」しながら子どもたちやその保護者と接しています。フィリピン出身のメラニーさんは、共に生きる地域の人間として接してほしいと訴えました。

様々な立場からの発言に多様な個性と文化を感じ、自分たちがやるべきことが胸に刻まれたフォーラムでした。フォーラムの内容は、「あーすフェスタかながわ」のホームページ (<https://www.earthplaza.jp/earthfesta/>) をご覧ください。

(あーすフェスタ企画委員 丸谷 士都子)

出前講座報告

蒔田コミュニティハウス(12/18)

横浜市南区の蒔田コミュニティハウス自主事業で出前講座の依頼があり、地球の木の出前講座チームの2人(乳井、田中)がファシリテーターをつとめ、身近なバナナを通してSDGsを考えるワークショップを行いました。参加者は、計10名。内訳は大人8名、小学4年生2名(プラス幼児1名)でした。

今回の出前講座の内容は、スーパーで売っている多国籍企業のバナナと村人の自立を支える民衆取引のバナナを比較することで、私たちの「買う」「食べる」という行動が世界にどのような影響を及ぼしているかを考えるワークショップ。

バナナやフィリピンについてのクイズや、フィリピンのバナナプランテーションと有機バナナを作っている村を舞台にしたミニお芝居でも、小学4年生の2名をはじめとても積極的に参加し、気持ちを込めてそれぞれの役割を熱演してくれました。

参加者の感想として、「今日知ったことをお母さんに教えて、よく考えて買い物するように言います」、「昔、バナナは高くて遠足の時しか食べられなかったが、気がついたら安くなっていた。その陰に生産者への搾取があったのね」、「バナナの話は奥が深い。農園で働いている人の様子が目に浮かぶようだ」、「クイズに答える形式がとてもよかった。グループで気楽に話し合えたのが良かった」、「セリフを言う事で、ただ



ミニお芝居を熱演する参加者たち

話を聞くというだけでなく、参加しているという意識があり、今日は本当に楽しかった」などがありました。

ファシリテーターの2人も参加者と一緒に楽しく学ぶことができたワークショップとなりました。

地球の木の出前講座は、ホームページなどで受け付けています。様々な社会教育団体や学校などでも行っていますので、実施をご検討されている場合は、どうぞお気軽にお問い合わせください。出前講座の会場でお会いできることを楽しみにしています。

👉 地球の木出前講座の申し込みはこちらまで
<http://e-tree.jp/demae.html>

(出前講座チーム 田中 浩平)

オンラインイベント SDGsよこはまCITY秋(2022/11/5)

ラオス・成長する図書館とは？～地域ぐるみで図書館を学びの場に

NPO 法人「ラオスのこども」現地駐在員の渡邊淳子さんを講師に迎え、地域ぐるみで図書館を学びの場にしていこうという図書館応用研修プログラムの内容をラオスから生配信しました。図書館専門家や学生の参加もあり、活気あるイベントになりました。

ラオスでは書店や図書館が身近な存在ではありません。今年度のラオス図書プログラムのカウンターパートであるNPO法人「ラオスのこども」(Action with Lao Children/以下ALC)は、ラオスの子どもたちの未来を広げるため、ラオス国内に300を超える学校図書館を作り、その設立時には図書館運営の基礎研修(本の配架、貸出などの基礎的な運営研修)を行ってきました。

応用研修プログラムは、本を楽しむだけでなく、図書館が更なる学びの拠点となり、持続して運営されることを目的に行われます。このイベントでは、ALCが2019年から2022年にかけて外務省のNPO連携事業で行った応用研修の概要と成果を聞きました。また、地球の木の支援で行われた応用研修も紹介されました。

図書館応用研修の実施内容

ラオスではコロナ禍でのロックダウンが長く続き、教員への図書館応用研修が行えない時期がありました。その期間は、日本の図書館情報学専門家である下田尊久氏(元藤女子大准教授)により、ALC現地スタッフのスキルアップがオンラインで行われました。その結果、教員向け応用研修実施時にはALCスタッフが自信を持って教員への研修を行うことができたという収穫もありました。応用研修は以下のような内容です。

①図書館サイン・展示の工夫

図書館がより利用されるようなアイデアを学び、その成果は、図書館のオープナーを設け、参加した学校ごとに展示発表されました。



図書館オープナーで展示発表

②授業における図書活用

本に親しむ読書推進からステップアップし、教科学習に活用できる学校図書館にしていこうことを目標としました。教科学習に本を利用するアイデアシートを研修で作成し、研修最後には学校図書館交流大会と題して、実践発表会が行われました。研修後も参加者が繋がり続けるように、SNSのネットワークもできたとのことでした。



学校図書館交流大会での実践発表

地域行政との連携、地域で支える図書館に

これまで設立した図書館では、次第に運営が活発でなくなるケースがありました。その理由は、図書館担当の先生の異動や退職、また、大雨で本が破損した、虫に食われて本が駄目になったなど。継続した運営には学校だけでは限界があるという意見が寄せられていました。そのため、設立した学校図書館が地域に根差し、生涯にわたる教育のインフラとなるように、郡の教育局(行政)、学校、村開発委員会(地域)が連携して取り組んだ3年間だったとのことでした。

地球の木の支援で行った応用研修

イベントの最後には、地球の木の支援で行われた中等教育学校2校(ピエンチャン都)での応用研修の様子を、速報で聞きました。休み時間やお昼の時間などの映像も紹介され、ラオスでの応用研修が身近に感じられるひと時となりました。

イベントには様々な年代の参加者があり、終了後も参加者同士の活発な意見交換がありました。このイベントがきっかけで、図書プログラムのボランティアに参加して下さる方もあり、地球の木のラオス図書プログラムにとっても繋がりが生まれたイベントになりました。今後さらに交流を深め、ラオスの図書環境向上に繋がっていきたくと思います。



図書館で教科(食物の栄養素)を学ぶ

(ラオス図書チーム 相馬 淳子)

*** 今後の活動 ***

2022年度も終盤を迎えています。ご寄付いただいた絵本は123冊、のべ112名のラオス語貼付ボランティアの方々にご協力いただきました。

今年度の国内活動の総仕上げとして、人形劇(ペープサート)を制作し、現地で活用できるよう映像と制作物をお送りすることにします。作業工程もたくさんありますので、一緒に活動するボランティアも募集しています。

作業日程: 3月10日(金)・31日(金)
参加希望の方は、地球の木事務局までお問い合わせください。

住民主体の開発って何？～ネパールの事例から～

ネパール・マンガルトール村での「幸せ分かち合いムーブメント」は「住民主体の開発モデル」を目指して15年間活動を行ってきました。皆様の温かいご支援のおかげで当初の目標を達成し、プログラムを地元政府と村の人々に引き渡し、2021年に無事活動を終了することができました。今回、「SDGsよこはまCITY」のオンラインイベントで、ネパールチームの2人(乳井、丸谷)がこれまでの活動と成果について報告しました。

第一部はパワーポイントの写真と図表を使って、パートナーNGO・SAGUNのカマル・フヤルさんの「住民参加型の開発」を解説しながら、様々なプログラムを行っていく様子を伝えました。人々の潜在能力、土地固有の知恵や伝統・文化を尊重して、どんな時も、話し合いを大切にします。人々が社会にどのような変化を望んでいるか、膝をつき合わせて共に考え、計画を立てて来ました。特に私の心に刺さったのはイギリスの開発学研究者ロバート・チェンバースのことばです。「地域住民に同情的であってはいけなし、彼らの命を救っているのだと考えてはいけなし。彼らは自分たちの力で何世代にもわたって生き抜いてきたのだから。むしろ、私たちが受け入れてもらったことに感謝しなくてはならない。開発とは、お互いに学び合い、支え合い、希望を持ち協力し合うことである」と。この考えが「幸せ分かち合いムーブメント」の活動を通して貫かれていました。

第2部はネパールチームの2人の対談で、活動を通して苦労してきたことや印象に残った出来事をざくばらんに語りました。その中で、第1期の奨学生ラム・シン君からメッセージが届き、紹介しました。「15年前に学ぶ機会を与えて下さった地球の木の改めで感謝します。皆さんから学ぶことはまだまだたくさんあります。現在、必要なことは人生をより楽しく幸せにする知識を学ぶことです」。

オンラインの参加者は20名を超え、多くの方々に興味をもっていただけました。参加された方々の感想を一部掲載させていただきます。



月桂樹の木の下で村の「いいとこ探し」

- 経済的な支援をするより教育を通して女性、子どもたちの人生の選択肢を広げるのが根本的な解決策だと思います。
- マンガルトールで現地の方々との長年の活動を通して信頼関係ができていたこと、何かをしてあげるのではなくシェアして共に進めてゆくことに感動しました。
- 地球の木の事業は本当に人と人の触れ合いがベースになっているのだと改めて感じました。
- 報告者と参加者の交流の時間があればさらに良かったと思います。

第一部の最後に丸谷さんがこのマンガルトール村の「幸せ分かち合い」プログラムの評価についてコメントしています。「何人の高校生が奨学金を得て卒業できたとか、どんな仕事に就いたとか、ヤギの飼育でいくら稼ぎがあったとかという数値を得るのは簡単ですが、『幸せ』の基準というのは難しいものです」と、「幸せ分かち合い」を柱とする活動の評価の難しさを問いかけました。

地球の木は「幸せとは何だろう」という問いを追いかけて、次のインドラサロワールという新しい支援地へ向けて答えを探し求める旅が始まっています。

(ネパールチーム 勝田 文隆)

インドラサロワール農村自治体(IRM)の「幸せ分かち合いムーブメント」

昨年9月からスタートした、インドラサロワール農村自治体(IRM)の「幸せ分かち合いムーブメント」。カウンターパートのSAGUNは、パートナーシップを組んだ行政や学校関係者との関係を築きながら、地域の人々を巻き込んだプログラムを展開しています。



この地域では教育への関心が低く、生徒の成績も芳しくありません。高校を卒業しても職に就くことができない若者たちがいます。そのため、経済的に余裕のある家庭は、子どもたちをカトマンズや近隣都市の学校に行かせる傾向があります。高校で数学を教えられる先生が少ないため、ベーシックスクール(1～8年生)の先生たちを訓練して、高校の数学を教えられるようにする6日間のトレーニング

が(写真)が行われました。

SAGUNは、また、IRMの教育関係者たちと協働で、すべての学校での子育て教育のための計画を立てています。子どもたちの教育の質を上げるためには親たちの意識を変えることも大事です。この目的を達成するため、保護者会を開催します。保護者会の準備も整い、いよいよ

SAGUNの出番です。子どもカウンセリングトレーニングや批判的教育法トレーニングの準備も着々と進んでいるとの報告がきました。

2月24日からネパールチームの2名が現地へ赴き、進捗状況をつぶさに見てきますので、次号をどうぞお楽しみに！

(ネパールチーム 乳井 京子)

ラオス勉強会

それは私たちの暮らしと密接につながっている!

ラオスプログラムでは「奪わない・奪われない暮らし：開発と森林」をテーマに勉強会を行っています。
メコン川流域諸国の森林減少について学んだ第1回に続き、
2回目は自分たちが現地で見聞きしたラオスの2つの村の事例を振り返りました。

森林減少の原因

ラオスに限らず東南アジアの国々の森林減少の原因を調べてみると、戦争による爆撃や人口増加といった原因のほか、開発と言う名の下での森林伐採が大きな比率を占めています。外国資本の誘致による水力発電ダム、道路や鉱山開発などの大規模インフラ開発、外国企業によるゴムやユーカリ、アカシアなどのプランテーションなど。さらに村人自身によるキャッサバなどの換金作物栽培の広がりなどもあります。

地球の木支援地での事例

ユーカリのプランテーションを免れた村の話

2006年、カムアン県のK村に対して、日本のある大手製紙会社が、村の森を借り受け、日本向けのユーカリのプランテーションとして使いたいという話が持ち上がった。村人に相談されたJVC(日本国際ボランティアセンター)スタッフはその製紙会社と何度も粘り強い交渉をし、生活の基盤である大切なその土地はどうしても渡せない、との村人の強い意向を伝えて、何とかあきらめさせることができた。しかし、その数ヵ月後には隣村の森がユーカリのプランテーションに変わっていたという。

外国企業によるプランテーションの場合、元々土地は国有なので政府には相当な額が企業側から支払われるが、村人への補償は途中でストップしてしまい、最後まで払われないこともある。また、あてにしていたプランテーションでの仕事も低賃金でごく短期間だったり、労働者を自国から連れてくるので地元の雇用は生み出さなかったりと、結局村人は騙され損の泣き寝入りというケースが一般的でさえある。タイヤや紙など私たちの暮らしに欠かせないものを得るために、現地の人々は安く使い捨てられ、「森林」という資源はその供給のために加速度的な減少を続けている。この深刻な問題は、私たちの暮らしそのものと密接に繋がっている。

ダム建設で移転させられた村の話

2005年に訪問したナカイヌア村。普段穏やかな村人が強い口調でJVCスタッフに訴えていたのは、ダム完成後の移転先での暮らしの不安だ。電力会社からは、新しい村では住居はもちろん学校も保健所も新設するし、何より電気が来る。ダム湖で魚の養殖ができて売れるし、換金作物を栽培して現金収入が入るなど、一見いいことづくめの説明ばかり。これまで豊かな自然の恵みに頼りながら、時には林産物を使って現金収入を得るといった暮らしを送ってきた村人たちにとって、「何でもお金」という移転後の新しい生活様式を受け入れることが大きな不安だったようだ。



ダムに沈んだナカイヌア村

メコン河流域国における開発事業や開発政策の影響を監視する活動を行っている環境NGOのメコン・ウォッチは、このNT2(ナムトゥン2)ダム建設の大プロジェクトについても、他団体の現地調査等も含め、継続的に情報収集を行っている。そのメコン・ウォッチによると、2010年のダムの完成を機に移転を余儀なくされたのだが、やはりふたを開けてみると、ダム湖での魚の養殖は当初の計画ほどうまくゆかず、今後の持続性も期待できないとのこと。下流のセバンファイ川流域の住民は天然魚の漁獲が激減し、雨季には水田が水没し川岸の農地も失った。さらに補償プログラムが不十分ゆえに、生活のために違法な焼畑を行って罰金刑を受け家計が苦しいなど、ダム建設によって貧しくなったと調査にきた研究者たちに語ったという。

開発は何をもたらしたか

「貧困削減」という旗印を掲げて遂行されたこのNT2ダム建設プロジェクトは、環境・社会問題の観点から計画段階で批判も多く、長い間ペンディング状態だったが、2005年4月、ついに世界銀行とアジア開発銀行がGOサインを出して走り始めたという経緯がある。村人の多くは、皮肉なことにこの「貧困削減を目指す開発」によって、それまでの豊かで自立した暮らしを奪われたといえる。

JVCは、今は南部のセコン県で、村の共有自然資源である森や川を管理利用する権利は村人たち自身にあり、それを主張する正当な権利があることを、法律研修等も取り入れて彼らに気付いてもらい、「奪われない暮らし」を維持するために継続的な活動を行っている。

グローバルサウスとグローバルノース(いわゆる途上国と先進国)との間に存在する構造的な問題。難しいこの問題を双方で解決して「奪わない・奪われない暮らし」を実現し、「地球市民」として共に手を携えて進む以外に我々の未来はない。様々な形でこういった問題に深く関わっている私たちの側の意識や暮らしを変えることが、今ますます求められている。

(ラオスチーム 中野 真理子)

遺贈寄付 — 次世代への贈り物

公益財団法人かながわ生き生き市民基金
専務理事 大石 高久

贈与には、つながりをつくる力がある。人類学者マルセル・モースの言葉だ。

人々が孤立を余儀なくされている現代社会において、贈与は、関係をつくり出し、社会や国家や世界を変える力を持っている。

かながわ生き生き市民基金が「遺贈寄付のしくみを一緒に作りましょう」と呼びかけたのが2018年6月だ。生活クラブ生協、福祉クラブ生協、認定NPO法人である地球の木とWE21ジャパン、神奈川ワーカーズ・コレクティブ連合会、ワーカーズ・コレクティブ協会、女性・市民コミュニティバンクと一緒に検討を進め、2019年9月にネットワーク組織「遺贈寄付相談・市民ネット」を立ち上げた。コンセプトは「次世代の生活者運動への贈り物」とした。それぞれの団体が「贈与」「寄付」を通じた社会運動の取り組みをめざした。市民ネットでは特に「遺贈寄付」や「終活寄付」に着目し、相続セ

ミナーや相談の取り組みをすすめている。

公益法人や認定NPO法人への寄付には税制優遇制度が適用される。税制優遇制度とは簡単に言えば、納税額の一部を寄付に置き換えられるしくみだ。日々の寄付では所得税と住民税、遺贈寄付では相続税が対象となる。公益法人や認定NPO法人への寄付は“不本意な税金の使われ方”への、小さな抵抗にもなる。

生活クラブ運動の50年間の歴史は、お金では買えない価値の領域を広げた運動の歴史と言える。「商品」に対する「消費材」、「自助」に対する「互助(たすけあい)」である。強制的な社会システムに、風穴・スキマを開けて、個人の自由を広げる社会運動である。

この運動＝生活者運動を次世代に繋げていくことがとても大事だ。まずは自分から、そして周りの仲間たちにこの取り組みを広げ、国家や世界を変えていく社会運動の発展につなげていきたい。



80歳になって 思うこと

今から30年前に生活クラブ生協に入りました。当時出来たばかりで、路上や空き地で商品の説明販売を手伝いました。何年かして、中学のPTA新聞作りで共に活動した友に再会したのです。今も月に1度食事会をしています。そして地球の木にも参加。昨年、20年ぶりに「ラオス報告会」に行きました。ラオスのホームステイに引率して下さった方が昔と変わらず司会をしていて、再会を喜び合いました。次にネパールのスタディツアーで一緒だった方に電話で何年前だったのか教えてもらい、当時の思い出を懐かしく語り合い、お会いする約束をしました。

年と共に思い出を振り返り、再体験を喜ぶことができます。そしてこの楽しみは人と人との繋がりがあっての事。多くの方々と出会い、様々な出来事があり全てが財産です。感謝。

「地球の木」良いネーミングですね。木がなければ私たちは生きていけません。先日、中村哲さんの映画を観ました。水路と共に多くの木を植え農作物がとれるようになったのです。私たち一人ひとりが大切な木です。木と同じように何もなくても、居るだけで大切な役割をしています。みなさま、お体を大切になさって、日々の生活がよい思い出となりますようお祈りいたします。令和5年、笑って笑ってエイエイオー。

(秦野市 末吉 悦子)



筒井由紀子さん (現KOREA子どもキャンペーン事務局長) 「アーユス賞」の2022年 アーユスNGO大賞に!

昨年暮れ、とても嬉しいニュースが飛び込んで来ました。地球の木の事務局長また理事として長い間活躍された筒井由紀子さんが、「アーユスNGO大賞」を受賞することが発表されたのです。アーユスは、仏教精神に基づいて1993年に設立された国際協力NGO。アーユスNGO大賞(茂田賞)は、これまで日本の国際協力NGOで多大な功績のあったNGO関係者を表彰するものです。これまでの受賞者は、1回目の熊岡路矢氏に始まり、大橋正明氏、谷山博史氏など錚々たる顔ぶれです。

筒井さんは、1997年地球の木が参加していた「北朝鮮子ども救援キャンペーン」(現KOREA子どもキャンペーン)に関わり、その後「南北コリアと日本のともだち展」や「日朝大学生交流」などの交流事業に深く携わりました。現在は、大阪—東京を往来しながら日本と東アジアをつなぐ活動を続けておられます。

第24回 地球の木 総会・報告会のお知らせ

日時 5月27日(土) 13:30~14:50 第24回通常総会
15:00~16:30 ネパール調査報告会

会場 オルタナティブ生活館 2F「オルタリアン」(新横浜駅から徒歩7分)

*オンラインでの参加も併用しての実施を予定しております。

*詳細は別紙の「第24回地球の木総会のお知らせ」もしくは地球の木ホームページをご覧ください。

ネパール調査報告会 ~4年ぶりの訪問、新しい村での出会い~

今年2月末から3月にかけて、新プログラムの進捗状況等を調査するために、ネパールチームの2人が現地を訪問しました。その報告とともに新しく見たもの、感じたことなどを語ります。

幸せ分かち合い年末募金

ご協力いただきありがとうございました!

今年も会員の皆さまをはじめ、

88名の方からご協力をいただきました。

皆さまのあたたかいお気持ちに心より御礼申し上げます。

◆年末募金総額…616,751円

〈寄付先別内訳〉

◆ネパール…175,401円 ◆ラオス図書…36,000円

◆ラオス…80,220円 ◆指定なし…325,130円

2022年にいただいたご寄付の領収書を2023年1月30日に発送いたしました。

活動日誌(12月~2月抜粋)

12月

- 4日 あーすフェスタかながわ2022
- 5日 ラオス図書貼付ボランティア
- 7日 デポー展示会(つなしま)
- 17日 第6回定例理事会
- 18日 出前講座(蒔田コミュニティハウス)
- 22日 ラオス図書貼付ボランティア

1月

- 14日 地球の木講座2022
- 20日 ラオス図書貼付ボランティア
- 21日 第7回定例理事会
- 28日 ラオス勉強会
- 30日 ラオス図書貼付ボランティア

2月

- 4日 ICT研修報告会参加
- 14日 ICT研修
- 18日 第8回定例理事会
- 20日 ラオス図書貼付ボランティア
- 24日~3月4日 ネパール現地訪問

デポー展示会 3月24日(金) 東戸塚デポー

地球の木カレンダー2023 「つなげよう 笑顔のバトン!!」

協力いただきありがとうございました。

壁掛け、卓上合わせて**557冊**ご購入いただきました。

今回でカレンダー販売は終了します。

皆さまの長年にわたるご協力を深く感謝申し上げます。



◆大山街道をブラブラ歩いている。夫の友人が出版したガイドブックを頼りに、東京は赤坂御門をスタートし、渋谷の人混みを潜り抜け三軒茶屋を経由して玉川大橋を渡った。江戸の人たちは、大山、阿夫利神社までの全長約90キロの道を3日で歩いたという。今のところ街道は田園都市線に沿っているの、私は適当な駅で区切って細切れに歩いている。先日は街道が自分の住んでいる所に一番接近した日で、ほんと馴染みの通りに出た時には、不思議な、一種幸せな気分になった。真っ青な空の下をのんきに歩いていると、「ここはとりあえず平和だな」と思えて、そして少し悲しくもなる。(K.S)